

第8期 小林浩明

八期の小林浩明です。私は併設中学一年の時、一応入部しましたが二年まではほとんどさぼっていました。中三の時、一念発起して人が変わった様にラグビー一筋に打ち込む様になりました。高二の時、努力の甲斐あってレギュラーになることが出来ました。とんとん拍子で勝ちました。東京で負けた学校はありませんでした。

三年になり、七期の卒業された後は我々(主将佐々木修寿、愛甲薫、上条保二、小寺正道、志村洋一、杉本丈憲、前田潤、矢部晴彦、吉村敏明、故・山田正光、小生)の力で七期の築いた偉業を継ごうと九期、十期と共に頑張りました。しかし春の憲法大会は決勝の対戦校日大二高に素晴らしい選手(ウイング、二年近藤)がいて彼の活躍を止めることが出来ず破れてしまいました。

夏の合宿を箱根の仙石原で行いました。七期の方、ほか大変大勢の先輩がコーチに来て下さった事を覚えております。毎朝、仙石原から長尾峠のトンネルまでのランニングで始まり、午前練習、午後練習と大変しぼった?しぼられた?事を思い出します。又その合宿では十期の上杉洋子さん、鈴木淑子さんの二人の女子生

徒が色々働いて下さり大変お世話になった事を特筆しておきたいと思います。

秋のシーズンに入り国体の予選が始まりました。東京の決勝で保善高を破り関東予選へ駒を進めましたが群馬県代表の高崎高校に3対6で破れました。ものすごいどしゃぶりの中、高崎高校の田んぼの様なグラウンドで試合をやった記憶が今もはっきり残っております。帰りの汽車の中で後輩たちに、来年は必ず勝ってくれなんて云ったような記憶があります。

続いて全国大会の予選が始まり、気をひきしめ直して昨年に続いて二年連続東京代表の座を狙いましたが、準決勝で豊多摩高に初めて破れ涙をのみました。

私たち八期の高校でのラグビーは終わりました。今、孫がそろそろ私が初めて楯円の球を手にした頃に近づいております。私は千歳でラグビーをやったおかげで大変愉快で楽しい高校生活を過ごすことが出来ました。又現在も大変幸せな気分で一杯です。素晴らしい先輩の皆様、同輩の皆様、後輩の皆さん、そしてラグビーに出会った事を心から良かったな—とっております。

○憲法発布記念大会

昭和26年春 決勝戦 千歳 × —— ○ 日大二高

○第6回国民体育大会高校ラグビー 東京大会

昭和26年9月9日～30日



○第6回国民体育大会高校ラグビー
関東大会準決勝(北関東代表決定戦)
昭和26年10月7日

千歳 (東京代表)	高崎 (群馬代表)
3	3
0	3
3	6

○第4回全国高等学校ラグビー大会(東京大会)

昭和26年11月～12月

- 1 回戦 11月18日 千歳 9 - 8 城北
- 2 回戦 11月25日 千歳 15 - 3 大森
- 3 回戦 12月 2日 千歳 32 - 0 早稲田高
- 準決勝 12月 9日 千歳 5 - 15 豊多摩

本 田	上 条	杉 本	山 田 (正)	安 部	小 林	前 田	愛 甲	小 寺	吉 村	石 塚	赤 根	佐 々 木	貴 島	山 田 (常)
2 年	3 年	3 年	3 年	1 年	3 年	3 年	3 年	3 年	3 年	2 年	2 年	3 年	1 年	2 年
FW				HB		TB			FB					

第 8 期
（ 同期生からのことば ）

千歳ラグビー全国大会を応援して

昭和二十五年十二月十六日(土)、神宮の杜に千歳高校歌が力強く流れた。勝利を喜ぶ全校生徒、それに応えるグラウンドのラグビー部選手たち。全国高校東京地区決勝は千歳高が青学高を24対0で破り優勝した。その日は短縮授業で全校を傾けて応援に向かったのだった。

法政・成城・豊多摩高を連破した千歳ラグビー部は前年に続いて二度目の東京代表の座に輝いた。翌日の日刊スポーツの一面の記事をご覧ください。(記事-A)

次はいよいよ全国大会だ。森川先生以下選手約二十名は西宮トキワホテルに旅装を解き、大晦日を過ごし明日の試合に備えた。

明くれば昭和二十六年元旦、雲ひとつない日本晴れの西宮球場に全国十六代表校が午前九時の開会式に整列していた。六甲おろしが大会旗をはためかせるなかセレモニーが終り各代表校が退場して行くが、一回戦の相手である大阪代表天王寺高校フィフティーンはグラウンドのベンチで学生服を脱ぐと、赤・白の縞のジャージ姿となり早くも練習を開始した。

千歳高は一旦ロッカールームに入り数分後に姿を現わすと、いくらかもたぬうちにレフリーのホイッスルが鳴って試合開始となった。

九時半天王寺のキックオフ。ウォーミングアップのちょっとした不足が響かなければよいが、と不安が筆者の胸をよぎる。地元である天王寺高は大勢の応援がつかけているのに、千歳高側の生徒は私ひとり。手帳を手に試合経過のメモをとる。25分ハーフ、当時はトライ3点、ゴール2点、PG3点で用語も現在使われているモール・ラックは無かった。

試合は千歳陣内で相手有利に展開し、更には千歳側のノックンと反則でゲインラインをじりじりと押される。4分右中間にトライを許すがゴールは成らず0対3。そこからようやく堅さの取れた千歳の反撃が始まり天王寺陣内でのプレーが続く再三チャンスが到来するが決定的なものが奪えない。一進一退の経過が15分以上続いた後、再びピンチを招くがドロップアウトで逃れ、ほっと息が抜けたように見えた

直後22分に左中間にトライを奪われてしまった。ゴール成って0対8。この後の3分間は千歳のリズムある攻撃とゆさぶりでHB杉本選手がスクラムサイドを抜けて待望のトライ、ゴールはならず前半3対8のスコアでハーフタイム。後半は10時千歳のキックオフ、10分経過するまでは両校タッチキックによる応酬を交えて互角の展開であった。

現在であればビデオカメラで試合を追うことも出来るが、物資不足の当時とてメモと記憶を頼りに紙上再現するしかありません。

後半は地元の利と遠征のハンデが徐々に現われて、11分・14分・17分・20分と4トライを許す結果となって3対20のスコアで惜しくも一回戦で敗退した。相手天王寺高校は勝ち進み高校日本一となった。くじ運も悪かったと思う。なにしろ天王寺高のハーフ団は青井達也・竹尾靖造両氏で、それぞれ慶応・早稲田に進学してその年の秋には一年生レギュラーとして活躍した選手である。(その後、青井氏は日本代表になる。)しかし、前評判の高かった天王寺高と対戦し互角の内容だったので、事実上の優勝戦ではなかったかと今もって私は信じています。決して負け惜しみではなく、当時のラグビー部の実力を高く評価するものであります。鈍行という各駅停車で、大阪まで十四時間以上要した時代でした。古い小さな手帳と新聞の切り抜きは今もって大切にしております。

栗田行雄

伝統とは、その価値を認め尊ぶものによって守り引き継がれる。そんな思いの小柄な少年が入部したのが受験を控えた高2の夏。

小寺正道

在部中の3年間に負けたのは僅か数試合、勝ちいくさの方が遙かに多かった。そんな“強い千歳高校ラグビー部”で1年からレギュラーとなり、全試合に出場して勝ち進んでいったことや、昭和26年元旦、2年の時、東京代表として全国大会に出場したことなどが、一緒に戦った仲間達の汗にまみれた顔と共に、いま懐かしく思い出されます。

前田潤

昭和24年、霞ヶ浦の初合宿。ホイッスルで仲間と一緒に走った。翌春の大会で優勝。今でも気持ちはラグビー。

矢部晴彦